

180
6
211

日本教育會館	
室	第
	三
六號	六國
一號	
四號	

會
函
架
號

小學讀本

農學啓蒙

十文字信介編

前編

卷之二

東國館

東京

陸前編
東京
大槻文彦校
陸前
十文字信介編

本 二

東京 田中芳男閱
同 大槻文彦校
陸前 十文字信介編

蘿蔔

蘿蔔を野菜中最に用ある根菜にして其種類數多ありと雖宮重練馬等を最上とし又其殊に肥大あるを薩州櫻島の蘿蔔にして細く長きを守口蘿蔔あり

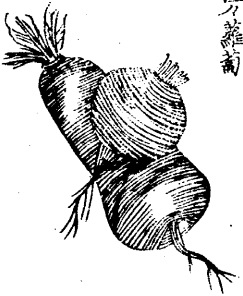
植地を何の種類も皆作土の深くして肥沃ある

を好ミ、又、其性舊地を嫌えざるが故に、毎年、同地
を作ると雖、毎々上品を産とべし

下種ハ、前日の晩、畑地を畦を立て、之に水肥を注
ぎ、早朝下種をよむ良法とせ、又、其播種の分量を、
一段、八九合を用ふるべし

苗を、嫩葉の時より、次第に間引き、終に減して、一
歩、三十五六本を残すべし、是より後、糞、濃糞
を灌ぎ、中打草取等注意をべし、又、極めて、肥大を
るものを作ると、枕みて、畑に孔を穿ち、之に肥
料を交ぜると、軟土を入し、一處に種子四五粒を

狸蘿蔔



狸蘿蔔

下をべし、胡蘿蔔、牛蒡等皆此法を施をあり

時時と、四季共、適せざることあり、又、害虫の生
つたる時、苦參(キツ子サハギ)又(クハラ)の煎汁を、水
を和して灌ぐべし、又、此虫害を避くるは、良法あ
り、其法ハ、種子一升を、鶏卵四箇の蛋白と、糠三合
とを、混じたるもの小鉢に、尋常の法の如く、蒔き

付くべし

狸蘿蔔を、一名ハク日蘿蔔とも
云ふ、近来舶載の根菜にして、圓
長の二種あり、其形皆小あり、播

種後、二三週間を採收の期と以、西洋料理に常
不生るを之を用ふるあり、作法を、蘿蔔と同トと
雖、元來、其根の小あるを以て、作土を、深きを要せ
ば、且、又、下種の法も、畦時、撒播、随意に、之を行ふべ
し

蕪菁

蕪菁カブラは、白、紫、黄の諸種あり、其形も、長圓の二種あ
り、本邦在來の種類にて、天王寺蕪菁、近江蕪菁、
及、安藝國山縣の、大田蕪菁を良種とし、洋種にて
ハ、西班牙、及、瑞典の産を、最上とし、洋和の二種と
も、其作法、総て蘿蔔と同トく、成長極めて早し

菜菔

菜菔カブは、從來、我邦にても、之を作りたむと、其種類
一二に過ぎざりしが、近年、西洋より、各種の良好
あるもの、傳へせり、各種皆、三月初旬より、九月下
旬に至るまで、播種し得べく、葉莖、及、根とも、年中
の食用に供すべし、作法を、畑地は、二尺幅の畦を
作り、埋肥をあけて、下糞を灌ぎ、土を覆ひて、溝播
をし、其苗、九、二三寸、小長をせしむ、次第に間引き、五
寸の間、一株を残すべし

胡蘿蔔

胡蘿蔔レンコンは、赤黄、白、紫の四種あり、形も、長きあり、短
きあり、作法を、粗蘿蔔ホトと同じ、但し、其苗四五寸の

莠牛

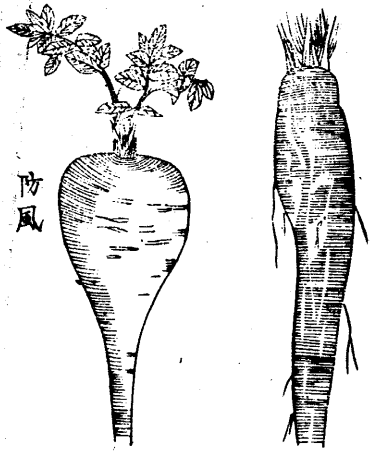
頃より次第に間引きて、莖葉を食料とし、九、五六寸の間、一本を残すべし、肥料を多く施すを利とす、種子を四五月の頃、蒔き付くべし、西洋にてハ、作りて牛馬の飼料と爲るもの、亦甚多し、牛莠を其植地、作法等、總て蘿蔔に同トと雖、下種の前、一夜の間、種子を醬油中に入れ、生立、殊に良しと云ふ

又種子は古株より、取る可し、取りたる種子も、一二年経過る者を用ゐるを佳し、以て北海道札幌の邊、ハ、野生のもの甚多く、極めて肥大あり

牡蠣菜

菊牛莠

亞米利加利防風



牡蠣菜、其根、上圖の如く、其風味牡蠣の如く、菊牛莠を其根牛莠の如く、風味牡蠣菜に似たり、亞米利加利防風を一種の香氣を有せり、故に、此根菜を乳牛に與ふまば、其

來せる根菜あり、何せよ、秋末冬初の頃根を採りて食用とし

防風

芋青

乳汁香氣を含ま、風味極めて佳あり、以上の三種とも其作法、牛蒡ゴボウと異ならざらん。青芋サトイモと肥えざる陰地を好むが故に、家屋の陰、又樹林の蔭等ふして、地味の厚しき所を選び、能く之を耕して、厩肥、及草肥等を鋤き込め、四五月頃、又再地を耕し、凡二尺を隔て、畦を立て、其低き所を、一二箇つゝ、種芋を植ゑ付くべし、其後、芽の長むるに從ひ、隴を切り掛け、塵芥、厩肥、蠶糞等を以て、根の邊を覆ふべし、車轂芋、白芋、紫芋等の作法、大略之に同ト

薬蕪

药蕪ゴニバクイモは、其性温暖を好めども、日當強き所を却て害あり、植地は、山間傾斜の地等、小石交りの土地尤宜し。作法は、冬初、深く畑地を掘り、厩肥、及草肥を糺き込め置き、冬末より、糞之を犁き返し、濃糞又も小便を澆き、四月初旬、塊根クワダを植ゑ込むべし、其疎密を、地味に依りて、一定せざると雖、大凡、畦を二尺と、三十粒許を、一坪に植ゑ、草肥、木葉等を厚く上を覆ふべし、三ヶ年を経て、大なる根塊を、為るものあり、抑、药蕪は、褐腐コヒニクを作るものあらざ、其生

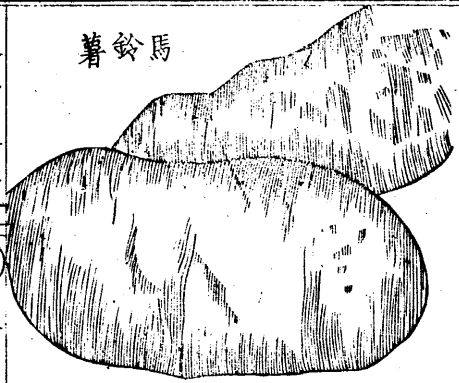
薯甘

根を搗りて、之を紙巾塗せバ、獸皮の如く、強靱を
らゝむを得るなり
甘薯カウモも、温暖の地を、好む植物にして、其作法至つ
て易く、其收納亦、甚多し、但、寒氣の強き國よても、
温養を怠らざれば、相應の收納あるものあり、而
して、其功用の多き、蒸焼、又ハ、種々の料理に用ゐ
るの外、刻み乾して、粉とるハ、團子、若くハ、餅とる
をべく、或ハ、澱粉を製し、或ハ、餡を造り、或ハ、酒を
醸すべし
種類ハ二あり、其根、淡白色にして、微く紫色を帯

ぶるもの、味、最も甘く、其根、黄色なるものを、根形大
なりと雖、味、劣り
地味を、輕鬆ある砂地を、可とせども、山畑の真
土等、其質堅く重き處あり、深く其地を犁返し、
厩肥、草肥、腐藁等を能く耙キリマ交へて、作る時ハ、砂地
ハ劣らざる收納あり
此薯を作るハ、先、温暖なる場所を撰び、苗代を
取立て、苗を仕立べし、其法、苗代の大小ハ、已の
意に任せ、苗代の西北を、藁菰の類にて、厚く圍ひ、
其内の土を能く耕し、厩肥を多く入せ、平地より

少く、高き程、二月中旬の頃、無疵ある甘
 薯を撰び、五六寸間、之を並べ、其上へ、草肥等の
 腐りて、土の如くなりたるを、厚さ三寸許、振懸け、
 濕菰と、覆ひ置くべし、然る時ハ、日からぞして、芽
 と生じ、四五十日の間、其蔓三尺乃至五六尺、
 延ぶとのあるを、其時、右の蔓を切取りて、三節毎
 ら之を切り、一本宛、畑地へ、植付くべし、植付の距
 離ハ、二尺程、畦と畦との間ハ、六尺程、蔓の
 延ぶに従ひ、其節々を埋めて、土を覆ひ置く時、
 節毎、根を生じ、甘薯畑中、充ちあり

馬鈴薯



馬鈴薯

馬鈴薯、多く、滋養分を含む植物にして、其作法、
 甚易く、風土を選むべし、生育して、其收納甚多し、其
 薯ハ、澱粉、及砂糖を製し、又、酒、焼酎を造るべし、莖
 葉を、焼きて「ポッター」を製し、
 澱粉を製し、之を刺水を用ひ
 て洗粉を製するを得べし
 又、此薯を、能く煮て、穀、桿、乾、葛
 等を混じり、以て牛馬を養ふ時
 能く、其体を、肥満ならしむ
 るの、にあらば、別殊の効あり

農學叢書

多量の糞溺を得べし

作法を早春より、能く土地を耕し置き、四月上旬

頃、一歩小九株を立つる様、種薯を植うるあり

種薯を切りて二片とし、其切口を藁灰を付け、一

時間程、陰干し、土中一二寸の深さ、植込付く

べし、全体のまゝ植うるは、損あり

肥料ハ、積肥、木灰等を最上とし、下糞類を忌む者

なり

此薯を如何ある地あても、能く生育せざるも、水

氣の溜る所あて、腐敗せざるの患あり、故に能く

乾燥せし地あ作るべし、豊作の年あ、一株よめ、

三四分の收納を得べし

西洋あてハ、此薯を食せざる處あ、之を常食と

せし人あ、身体壯健あして、且、肥満せり

米國種ハ、長形あして、皮の赤き種類あり、種薯を

植込てより、凡、九十日を経て、成熟す、其味、黄種ハ

劣まども、作法を、甚易し

菊薯ハ、風土ハ係らざるがして、能く生育し、其收量

多きこと、馬鈴薯ハ優まじり、根形ハ、馬鈴薯の如く、

花様ハ、向日葵の如し、其食法、及、貯藏法甚多し

薯菊

薯蕷

薯蕷カニイモを地層の深き、真土質の地み宜し、都邑の近傍トナリにて作る時を殊ことふ、許多の利益あり
畑地ハタチより畦幅二尺を隔て、能く腐らせしむ厩肥、堆肥等を耙ハき込こみ置き、二月中旬の頃、五六寸を隔て、三四寸ふ切りしる種薯を植うべし、其植方ハ薯を少しく横よこに偃よせ、上は三四寸許の土を覆ふべし、又早年コトシより時々、灌水を要せまども、常は人糞を嫌きらふあり
蔓つたの稍長せし時を、竹たけ或は柴しばを立て、之これに這はひ纏まとせ、或は棚たなを構へて、纏まとせしべし、且、其蔓既すでに長ながせ

し時を、必かならず其先を摘とり去るを要す
肥料ハ、油糟あぶらご及干鰯かほ等根の側そばに施まして著功あり、霜降りて後堀り抹ぬるべし
山背不用の地やまがしは、此薯このいもを作りて、大おほ利を得べき、妙法あり、其法ハ竹たけ或は柴しば等らにて、山背やまがしは、箒はきの如きものを作り、側邊そばより、作土つくちを入いれ、乾糞かんとんを交まぜ、零餘こぼれ子こ或は薯片いもかたを植うえ込こむべし、培養法等、總て畑地はたちに作る者ものは同おなじ、此法を用ゐて、作りしる者ハ、箒はきを破れハ、容易やすに堀り出し得るが故ゆゑに、畑はたちに作るものは比ひをまますハ、益多くして、且、便あり

佛掌薯

佛掌薯^{ブツテイモ}能く培養をせば、多く收量ありて、凶年の備ふ適當あるものあり、其作法を、粗薯類^{コサト}と同し、但、其丈短き^{ミナ}故に、作土に、深きを要せば、若、土龍^{リウ}の之を害する時、葱^{コノネ}の葉を采りて、其邊に散すべし。

甘露^{カンロ}児^キは、肥沃の陰地、木蔭の濕地等、宜し、三四月の交、地を耙きて、肥料を施し、一尺つゝ隔て、根塊^{ネカ}を植ゑ、上は、糠を播き散らすべし、此根塊を煮て食するの外、蜜漬、又ハ、紫蘇漬とせば、風味殊不賞^{フシヤカ}をべし。

甘露児

卷丹

慈姑

卷丹^{マキニ}は、リヤカ^{リヤカ}云ふ百合^{ヤク}の如く、其味美ならず、雖、是亦、其根に、多量の澱粉^{デンプン}を含むものにして、其味亦賞をべし、秋季、葉間の瘤^{トモ}を取り、春時、之を五寸隔^イに種を付くと、三年にして、大なる鱗根を得べし、肥料を、下糞等皆可あり。

根の鱗片^{リンペ}を剥き取りて、食する時、其根軸を残りて、植を付くと、二年にして、大なる鱗根を得るものあり。

慈姑^{コウコ}ハ、泥水等の、多く流し入りて、稻の出来過ぐる所、宜し、三四月の頃、九、七八寸隔^イに、芽を上方

蓮

小向丸くめて、一顆つゝ、種を付くべし、其價貴きが故に、市邑に近き處に作せば、利益最許多あり、其掘取を、九月十月の頃を、好期といひ、蓮を殖せよ、子蔞及根分の二法を以て、子蔞を、八九月頃、其子の黒く堅まざるを採り、其頭を石、或は瓦にて磨り、肥土を包みて、泥中に植うべし、但、實りたるもの、直に之を種うるも、能く生育するものなり、
 根分法を、二月頃、根の疵なきものを掘り、二節若くは、三節を付け、切根と為して、植を付くべし、肥

蓮

料ハ、小便糠を第一といひ、小便糠とハ、糠を小便に浸し、うるものを云ふ、
 種類は、二あり、一は其花紅色にして、其根は粘氣なく、一は其花白色にして、其根は粘あり、故に、之を餅蓮と云ふ、又、近來、清國より、渡うたる種類ハ、根、葉、及花とも、非常な、大なる白蓮あり、各種共、其植地ハ、泥田、深田、及池沼等皆可なり、
 蓮を、尤も作り易きものにして、一度、之を植を置く時ハ、幾年となく、繁茂し、又廿日毎に刈り取ると得へし、

薤

種子を二月頃之を蒔き、九月其苗四本づゝと一
株と一灰肥を用ゐて種を付くべし、雨の降る時
に小便、藁灰等を施せば、生茂尤速あり
此菜葱と同種の植物なるを以て之を列ね植
うせり、花時互に雑種を生むるの恐あり、故に種
子を取るべし、必し列ね植うることを勿き
薤も其根を味噌、醬油等も浸して食し、或は酒糟
も漬け、或は酢も浸し、或は少湯引きて酢、醬油
も漬け、之を菜として用ゐるあり
植地は白砂の軟りある肥地を選び、初め二三度

蒜

之を起き、二三月の頃根を分ち、一科も四五本づ
ゝ、植を付くべし、假令木蔭等の地と雖、能く繁茂
せるをのなり
蒜も大小の二類あり、大なる者を良種と云、土地
も肥沃にして軟ある處を好み、下種は春秋の間
皆可あり、植方は畦を小筋も立て、三寸隔、一箇
づゝを列ね植うべし、肥料も能く熟しとる、既肥
等を佳ありと云、又畦間を耕耘する度毎も必し糞
水を灑ぐべし、夏日此菜を食せぬを中暑せば、冬
日之を食する時ハ、絶て寒胃の患ふしと云へり

葱

葱ネギは、大小二類あり、各種皆同トク、三月頃種子を苗床ナベに下し、稍長ずるナベに至りて、畑地ナベに移さべし。土地ハ、其層深くして能く肥へたる處を選び、小便、藁灰等屢ナベ與ふべし。

移植法ハ、先、畦ナベを深く掘り、小便、或ハ藁灰等と與へ、四五本を一科とし、之を植ふ次第ハ、厚く土を覆ふべし、是、白莖ナベの長くして、且柔ナベあるを欲してあり。

葱球

葱球ネギノクマハ、單ナベに、其球根のみを用ふるべきものあり、其食法ハ種々あり、或ハ煮て之を食ひ、或ハ酢ナベに



葱球

漬けて貯ふべし。作法ハ、七月、種子を苗床ナベに蒔き四五寸ハ長ぜし頃畑地ナベに、二尺の畦を作り、四五寸隔ナベに、植ふナベ。春ふべし。肥料を與ふるナベは、堆肥、雜糞等、尋常の葱ナベに用ナベふるナベと同トクナベをべし。

薑

薑ショウガハ、俗ナベに生姜ナベと云ふ、辛料ナベに用ゐるの外、蜜漬ナベ又ハ砂糖漬ナベをナベべし。之を作りナベは、深く、細砂ナベの肥地ナベを耕し、能く之を肥し置き、種根ナベの痲ナベ多く、芽の少し出てナベたるものを選び、一芽ナベづつナベを附け、切

荷藁

りて植うるを、其距離を、九、六寸許ふして、薄く土を覆ふべし
芽の長くて、漸く土上不出る頃、之を中打して、肥料を施すべし、肥料を、下糞、厩肥、油粕、及、麥糠等皆効あり
清國の種ハ、最佳良にして、其大尋常の薑より比し、倍々三倍、或は四倍あり
藁荷ハ、夏秋の二種あり、五六月、根の側より花を生じ、秋に至る者と、夏藁荷と云ひ、七八月、花を着くるを、秋藁荷と云ふ、其茎、及、花を料理す

燕紫

用ゐるべく、葉の織緯ハ、草履の裏に造るべし、植地ハ、葡萄棚の下又ハ、木陰等の陰地を好むあり、二月頃、根を分けて植へ、塵芥、又ハ能く熟しとる、厩肥を覆ふべし
紫蘇ハ、二月中旬頃、種子を苗床に蒔き、三四寸の頃、移し植うべし、植方ハ、畦間を、九、一尺五六寸と為し、距離ハ、四五寸、又ハ、六七寸と為し、色紫にして、葉の縮みとるを最上の種類とし、肥料を苗床の中、及、移植の後、各一度づつ與ふべし

蓼

蓼^{タデ}、其葉を辛料^{シヤウリョウ}に用ゐるべきものにして、其莖葉赤色あるものあり、緑色なるものあり、又、其葉形圓潤なるものあり、細長かるものあり、共、不皆二月頃、下種^{ゲチュウ}すべし、植地を濕地を良しとす

蕃椒

蕃椒^{トウガラシ}、其實^{シヤク}を辛料^{シヤウリョウ}に用ゐるものなれども、其辛味なき種類も、野菜の如く用ゐるものあり、其實の形状種々あり、其色赤紫黄等の別あり、其作法を總て茄子に同す

山葵

山葵^{ワサビ}、其根を辛料^{シヤウリョウ}に用ゐる者あり、深谷の濕地、不自生^{フジキナ}すとも、湧泉ある濕地にてハ、能く之を

人こいたびさ日



作^{ツク}るを得べし、又樹の下、或は、日蔭等、之を作ると、可^カありの葉^ハ山葵^{ワサビ}を得べし、此莖葉を茹きて食へむ、其味殊^{マタ}に賞^{ウツクシ}をべし

根^ネの辛味^{シヤウミ}山葵^{ワサビ}に似たり、其播種^{ハクチュウ}の法^{ホウ}は、二あり、一法^{イチホウ}は、三月頃種子^{タネ}を床蒔^{トコ}す、一法^{イチホウ}は、其根^ネを寸断^{サンダン}し、畑地^エに、二尺幅^{ニシヤク}の畦^{ヅマ}を作^{ツク}り、四五寸隔^{ゴサウ}に、植^{ウエ}を付^{ツケ}くべし、培養^{トウヤウ}の法^{ホウ}、總^{スベテ}て胡蘿蔔^{ゴロウソク}に同じ

歸當土

土當歸ハ、三月頃芽を生じ冬の末及仲春の間、土中の芽を采りて、食ふべし。山野中自然生あり、其根を取り分けて、深く植ゑ、馬糞塵芥等を覆ひ置けバ、早春、佳良の莖を得べし。

どう葉松

松葉マツバハ、松葉マツバの形、松葉マツバ不似たるが故に、此名あり、滋養分甚多く、洋人の極めて貴重をる者あり。其嫩芽の、白色なる者を、食ふあり。下種ハ、三月、種子を畦蒔ふ。十月、畑ハ、幅三尺許の畦を作ら、少し土を穿ちて、腐熟せる堆肥を、厚さ凡三四寸許入也。根ハ、傘の如く之を擴げ、凡一尺隔ふ移し。

松葉マツバの嫩芽



植ゑ、兩側より、土を盛りうくべし。培養宜しきを得ば、直ハ、翌年より芽を得べし。自後ハ、年々宿根より芽を生じ、夏月の間、常ニ其芽を采り得べし。其後ハ、芽を采らむして、長せしめ、霜降の節ハ、至りて、其莖葉を、畦の上ハ、刈り纏をべし。其嫩芽ハ、味甚美し。て、價亦極めて貴し。貯藏の法ハ、酢漬、塩漬、水煮等として、罐装し置くべし。肥料ハ、雜糞、堆糞、及馬糞等皆宜しく、殊ハ、鳥獸の腐肉、屠牛所の血汁、及骨類を、賞用を、又時々、食塩

濱防風

芥

芥早

少許を取り、株の側へ、散布をべし
濱防風を、料理用の香菜あり、海濱の白砂へ、實を
蒔きて、手入をる時を、能く繁生を

芥ハ根、并ふ葉を食ふべき、野菜あり、根を米り、
水濕の地へ、分ち植ふ、少しく肥料を、與ふと、數
回刈り取り、食ふべし、之を刈りたる時、泥水
と、漉ぎ掛くは、芽を出きこと、最速あり
俾芥ハ、洋人の、賞美をる香菜にして、肉を食する
時、生れて之を用ゐ、又、杯盤の裝飾へ、用ゐるか
り、下種の期を、三月以後、九月迄を宜しといふ

塘

植方も、陰濕の地へ、幅二尺許の畦と設け、溝播ふ
を、と、宜しといひ、肥料を、堆糞、雜糞等、皆可あり
塘蒿を、生のも、其白莖を食ふべき、香菜にして、
其佳味、賞をべく、其價も亦、種りて高貴あり
下種を、三月中旬より、九月中旬まで、何の時へ、於
てするも可あり、但、其蒔法を、苗床へ撒播し、其
苗の二三寸長むるや、陰地を選び、三四寸距
り、假植し、其六七寸長むるや、更へ畑地へ移す
べし、之と移し植ふるも、其畑の畦幅を、五尺ふ
し、其中央へ、幅深ども、二尺の溝を掘りて、一尺距

菜の二
の二
の二

野蜀葵

冬款

小植え、土を二寸許覆ひ置き、其長せよ、從ひ、漸
 次、兩側より、土を懸け、其度毎、水糞、或は、人糞
 の薄きを灌ぐ、取入、其白莖の、尺餘も成り
 頃を可と以
 野蜀葵、莖葉、及、根をも食すべし、濕地、樹の下、及
 籬の根等、肥沃の陰地、畦を作りて、植え付くま
 り、能く繁生を、但、其白莖の長きを欲せば、畦の左
 右より、適宜、土を盛り懸くべし
 款冬、莖、及、花を食すべし、種類、大小二種あり、
 小種より、水款冬を賣し、大種より、秋田款冬

芥菜

平莖菜

を最佳と以、皆日光を、忌むが故、日蔭の地を選
 びて、作るべし、肥料ハ、小便糞、及、厩肥を最上と以
 芥菜ハ、其種子を、粉にして、辛料、用ゐるとの、亦
 り、八九月頃、能く糞養せる、苗床、下種し、時々間
 引きて、糞水を與ふべし
 苗の延びて、四五寸、至る時、八九寸、隔、一本
 づ、植ゑ付くべし、又、常々、虫害ある畑、此菜の
 莖葉を、翻き込む時、能く、其害を絶つ、の、とら
 ぶ、兼て、地面を、肥沃、なると云へり
 平莖菜ハ、其莖葉を、漬けて、食すべし、野菜あり、下

種培養の諸法とも、蘿蔔を作るに異ならざれば、根を需むるものよ、あふざるを以て、作地を左のよ深きを要せば

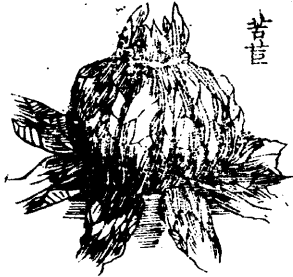
又、此菜は、虫害に罹り易き、をのふれば、發芽後、注意して、之を防ぎ、寒中畑地へ、其儘に置く時は、藁塵芥の類を、振り懸けて、霜雪の害を、防ぐべし。近來、清國より渡りたる、體菜、山東菜、などのへるもの、及、從來東國にて、三川烏菜と、云ふものも、皆此平莖菜の、一種なり

莖菜

萬莖ハ四季共ニ植うまども、六月、種子を取りて、

苦莖

八月、之を蒔くを、通例とし、其苗、稍長ざる時、適宜の畦を作りて、移し植ふ時々、小便、泔水等を、與ふべし。近來、舶來の種類も、最良好ある者あり、其葉軟く、しぐ、苦味少く、生食、煮食とも、極めて可なり



苦莖ハ二種あり、一は、其葉縮緬の如く、皺むが故に、一は、之を縮緬と云ふ、八月、種子を苗床に蒔き、延びて、三寸許に至ると、畑地へ、九、二尺許の畦を作り、一尺距に、植ふ付

くべし

葉の相應小長ぜし時、圖の如く、藁わらにて、結び束ぬべし、二三週間を経過せば、内部の葉、悉く白く變ぢ、之を采りて、酢を注ぎ、生じて食すべし、斯くの如くするを、洋食にてハ、サラダと云ふ、糞培の法を、總て、萵苣レタス同し

蕓薹

蕓薹ブロッコチ、地味を嫌むべし、能く繁生を、若苗わかぼこを、人畜の食とあり、種子よりハ、良好の油を得べし、培養の法を、總て、蕪菁カブ同し

又、此蕓薹の一種コブツナ、小松菜コブツナと稱するものあり、專

波陵草

其葉を食する者ありて、風味殊小可あり、波陵草ハレンソウを作るに二法あり、一法を、苗を作りて、畝うらに移植し、一法を、六月頃、地を拵え、糞を打ち、七八月の頃、下種するあり、又、種子を残り置きて、二月三月の頃、之を蒔くも可あり、蒔き方を、種子と土を合せ、畦筋を、少し深く、蒔き付くべし

植地を、種類小依りて、異同あり、即ち、圓葉種ハ、肥沃の濕地を好み、三角葉種ハ、乾地を好むあり、蒔き方を、畦蒔、撒播、共小可あり、注意して、能く培養すべし、莖葉甚柔なやまなりて、風味、殊小賞すべし

藍甘

藍甘



甘藍カラン、一名を椰菜と云ふ、其種類甚多、葉の球形を、あせる者を采りて、之を細判し、煮て食用とし、其周邊の葉ハ、家畜の飼料とすべし
下種を、床蒔を法し、以て、夏日の用を、供する者ハ、三月より下種し、冬季の食を、供する者ハ、七八月の頃、

下種をべし
苗の、凡、二三寸小長ざる頃、抜き取りて、假ふ之を、四五寸隔、小植え、白晝を、覆を設けて、之を畑地へ、移し植うべし、畑地ハ、肥沃なる、真土を

菜珠

菜珠



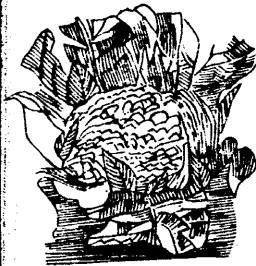
最上よき、植法を、一坪に、九、九株を、度とし、小孔を掘りて、糞土を入き、其内へ、植え込むべし
肥料を、雜糞を、最良しと云、多量小與ふと、利益殊小多し

名ナ
珠菜ジュサイを、甘藍と、蕪菁との、中間種なり、其地上より出で、球状を、あせる者を、采り、煮て之を食し、葉を、家畜の飼料とすべし
下種小、二法あり、一は三月頃、種子を、苗床小蒔き、三四寸の頃、畑地へ、幅二尺許の畦を作り、一尺

菜花

距、小、移し植え、一を、始めより、畑地、小、蒔き付くる
あり、培養の法を、總て甘藍、小、同ト
花菜、え、近時舶来せる、野菜、小、一、其種類、小、二あ
り、一を、ゴリリフロワと云ひ、一を、ブロッコリと
云ふ

菜花



此菜を、作る、小、ハ、七月頃、種子を、苗床、小、蒔き、移し
植うる、こと、甘藍の、如く、冬、小、一、冬、小、笹竹、或ハ、杉葉を、樹て、
霜雪を、防ぎ、翌年、小、至りて、其
花蕾を、採り、或ハ、煮て、食し、或

朝鮮薊

え、酢漬、小、一、貯ふ、小、一
朝鮮薊、ハ、花蕾の、將、小、開り、ん、と、して、百合根の、状
を、ある、せる、頃、之を、採收し、鱗片の、軟肉を、食す、但、其
食法、或ハ、生、小、一、食し、或ハ、茹き、或ハ、油煎、小、一、て、
食す、小、一

此菜を、殖する、小、一、春、又ハ、秋を、以て、根分、若くハ、子
蒔の、法を、行ふ、小、一、即、根分、小、一、て、殖する、小、一、其根、株
を、分ち、栽え、子蒔、小、一、殖する、小、一、畦幅を、二尺、小、一、作
り、種子を、溝播、小、一、十月上旬、畑地、小、一、三四尺の
畦を、作り、三四尺、隔、小、一、移し、植うる、あり



肥料も、何品を施せも、妨
るゝと雖、就中、堆肥、及、馬
糞と良とい

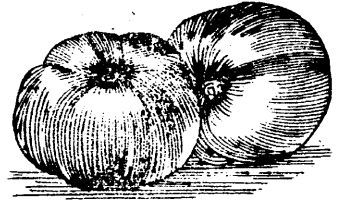
茄子

茄子ハ、種類小依り、其實の色も、紫、青、白、種々あり、
形も、圓きと、長きあり、種子を蒔くも、ハ、暫時、之を
水に浸し、灰沙と合せし、蒔き付くべし、其苗床を
東南小、面をり地をとり、一月頃、能く之を耕し、牛
馬の糞、又ハ、下糞を埋め、上小高く、軟土を覆ひ、水
糞を灑ぎて、下種をべし
既小、種子を、苗床小下し、時ハ、直小細土を、四五

分許覆ひ、其上小、古藁等を被ひて、温養し、苗の葉
九、八分許の頃、覆を去り、時々、肥水を洒ぐべし
苗長し、九、四寸許に至ると、其中強くし、且、一
様ある者を選び、之を移し、植うべし
植法も、植地小、小孔を掘りて、糞土を入れ、立根の
先を、少し、缺き去りて、植を付くべし
肥料も、灰肥、塩水、下糞、小便、及、泔水等を、混和した
る者を、最上とし、干鰯、油槽、溝泥等、之小亞ぐ
此植物も、尤、同地を、嫌ふが故小、必、年々、地を替へ
て、作るべし

茄蕃

茄蕃



蕃茄アケナスを、或て、生のまゝ、酢をかけ
食し、或て、煮て食するを、常とせ
ども、蕃茄醬カシヤウを製して、罐装ツヅメする
を、最利ありとい

此茄の作法は、總て尋常の茄子と
同し、唯、其枝葉極めて、蔓延する者
あれば、竹、或て、粗朶コトふて、塙ツツを作久之は頼ら
ざるを、必用とい

甜瓜

甜瓜アハカは、大小あり、小なる者、最甘味多し、植地を、必
しも、肥沃を要せざると雖、土性強くして、濕氣ある

且、旱魃の節、水を引くふ、便なる處を、選むべし、下
種法も、一月頃より、屢畑ツツを打ち、畦の間を、九、四尺
隔とし、孔を、一尺隔、ふ穿ちて、糞土を入也、三月初
旬、三四粒づつ、蒔き付くべし

苗長し、凡、四寸許ふ至せば、强健なるを、二本
を残し、其餘を、總て抜き去るべし、其後、株の周邊
を、掘り廻し、干鰯、又て、油糟を埋むべし

三葉、或て四葉の頃、其蔓先を、切り留むべし、又、葉
間より、出る枝を、四方へ配久、其蔓先も亦四五葉
の時、摘と去るべし、良き瓜の付くは、即、此二番

瓜胡

蔓種久矣、蔓亦雄花の多ありて、雌花なき者あり
を速ふ、其根元より切り去るべし
下種の後、初めて、花を着くるまで、屢中打して、
雑草類を、抜き去るべし

瓜冬

胡瓜（ハカウリ）の作法は、大略、甜瓜（アメウリ）と同し、只、竹、及、柴等（タケ、クサ）を立
て、蔓を這ひ上らしむると、異なりといひ、暖地ありて、
早春之を作り、寒地は賣出を時を、非常の利を得
べし
冬瓜（トウワタ）の作法は、種子を、一粒づつ、灰（ハイ）を合せ、能く糞
養せる、苗床は蒔き時々、水肥を注ぐべし、移植を、

瓜菜

四月頃を、好期といひ
植地は、畦を廣くし、孔を作り、肥土を入き、雨天
の前之を植うるを佳し、取込の期は、瓜の外面、
白粉を着くる時を、宜しとす

瓜浅

菜瓜（サイウラ）は、作法、甜瓜（アメウリ）と同し、之を漬瓜（ヅケウラ）と呼ぶを、漬て、
食用とせればあり

瓜西

浅瓜（アサウラ）は、一ふ之を白瓜（シロウラ）と名く、作法、甜瓜（アメウリ）と同し、植
地は、南向の暖地を、上とす
西瓜（スイカ）は、其果の熟せし時、生み食むるを、常とす
まど、其若き時、於ては、漬物（ヅケモノ）として、用ゐるべ

瓜南

、而して其作法甜瓜不同ト雖其畦間も凡倍
餘の廣きを要す又蔓の下あり必稈の類を散
布すべし洋種中肉色黄あるものも其味尤美也
南瓜カボチャを作るも尤日當好き處を選び直蔭又
苗床小育てたる苗を移し植うべし
畑地ハ極めて肥沃あるを佳とす又蔓も平地ハ
這えしめ或は架上ハ這えしむるの二法ありと
も架上ハ這えしむるを利ありといひ又雄花の花
粉を注意して雌花ハ點せれば其實入殆十倍あ

盧壺

り
近来外國より渡りたる種類ハ頗大なるものあ
り其最大なるも一顆を一人ハて持運ぶこと能
わざる程なり西洋ハて牛馬ハ與ふる爲め多く
作るものも此種類あり

瓜絲

壺盧ユウガも其種類ハ依り長さ短き圓き等其形種々
ありと雖長きをのちと圓き者のも食ふべし作法
も粗南瓜ホ不同ト但其蔓も長く延びしむべし
絲瓜ヘナマの作法も壺盧ハ不同ト其若を時め菜と
て食用ハ供し其充分ハ成長せし時ハ肉を腐し

鐵維と採り、以て種々の用ふ、供をべし、近來、清國より、渡りたる、長絲瓜も、其長六尺不餘るをのあり、頗る良種なりて、能く我國不適せり

農學啓蒙前編卷の二終

明治十三年九月十四日板權免許
同十五年十一月廿五日再板御届

前篇二册 定價金 廉拾錢

編者兼出版人
發兌所

宮城縣平尻
十文字信介
廣島縣廣島區七百三番拾三番邸寄留
廣島以文社
同縣同區本町通西橋町

各地賣捌	
東京京橋區新着町 阿南島馬町 阿日本橋通三丁目 阿芝區神明町 大坂備後町四丁目 阿京三條通	農書館神谷 穴山篤太郎 丸屋善七 和泉屋市兵衛 吉岡平助 村上勤兵衛 杉本基助 野田大二郎 松原善平
紀州和歌山 廣島西條町寄留 山口仲布町 長州萩瓦町	同船木町 同豊福町 尾州名古屋玉屋町 同 備後福山 備前岡山 美濃大垣 遠州掛川 甲府常盤町 駿前仙臺
	中原卯平 村谷傳三郎 留島藤十郎 鬼頭平兵衛 永樂屋東四郎 整理社 細謹社 玉井忠造 山内彦十 内藤傳右衛門 菅原屋安兵衛

小學讀本

農學啓蒙

後編

卷一

十文字信介編

東京圖書	
新門	四六函
五部	八架
類	號

23a

K110.6
23B
2